

菅野英機

「経済学の父」と呼ばれるアダム・スミスは、日本では『国富論』を著した英国の経済学者として知られている。『国富論』は、米国が独立を宣言した 1776 年に刊行されたが、当時彼はすでに大学教授を辞職した後の人生後期にあった。アダム・スミスは、それ以前、グラスゴー大学で教授を務めており、1759年には『道徳感情論』初版を刊行して、道徳哲学者として活躍していた。

当時英国は、産業革命が始まり、酪農を中心とする農業経済から織物産業を中心とする工業社会へと急速な変化を遂げつつある時代で、それは同時に封建社会の崩壊と市民社会の到来を意味していた。そのような新しい市場経済の社会における共通理念として『道徳感情論』を著した。

アダム・スミスの学問の基礎は倫理学であり、その上に立って市場を中心とした新しい社会が形成されるなかで、個人の利益追求が社会全体の利益といかに合致しえるか、それを裏付けようとした。

アダム・スミスが生きた18世紀のヨーロッパは、まだ中世的要素が残る、近世・市民社会形成に向けた過渡期であった。彼は『道徳感情論』において、共同体の人と人との関係について徹に入り細に入り説明しながら、新しい市民社会における共通認識を描こうとしたのであった。決して個人だけを取り出して個人主義的市民社会を描こうとしたわけではない。

ところが、日本に移入されたアダム・スミスの考え方は、その前提となるべき共同体的な側面がほとんど捨象されてしまい、きわめて意図的に、市民社会は共同体的な社会とは対立関係にある別な社会であるかのように説明された。しかし、アダム・スミスが主張したのは、あくまでも共同体を土台とする市民社会の特徴についてであった。

利益の追求は、エゴイズムとしての自分さえ良ければよいという利己心の追求ではなく、それは同時に他人の利己心の尊重を必要としており、社会全体の厚生や他人の利益との調和ある発展でなければならない。アダム・スミスはそれが成立する条件を伝統的なコミュニティに包み込まれて存在する市民社会と自由で競争的な市場に求めたのである。

キリスト教的個人主義は、キリスト教の教えがそうであるように決してエゴイズムを意味しない。個々人が自分の利益のために利己心を発揮しても「神の見えざる手」に導かれて、社会全体の発展に繋がると考えた。

天体の運行にたとえられるアダム・スミスの自然調和が成立するためには、いくつかの前提条件が必要だ。その一つは、個人が共同体に取り囲まれており、共同体の中にある個人である。アダム・スミスの考えには、共同体から切り離された個人というものは無い。常に個人の周囲には家族があり、地域社会があり、さまざまな共同体の中にある個人なのである。ただし、共同体の中にあるといっても中世のような主従関係ではなく、一人一人

が自立した自己責任で動く個人である。そのような社会を「市民社会」と呼ぶ。

ところが、日本の経済学では、個人を共同体からはずして説明しようとし、制約条件としての共同体の役割を「見えざる手」にすり替えて、価格メカニズムと競争にその役割の全てを課してしまった。それは、家族や共同体の役割を否定し、全てを個人に還元して、社会を砂のような個人の単なる集まりと捉える歪んだ思想に基づいてアダム・スミスを説明しようとした結果であつたと見ることができる。

アダム・スミスの主張する市民社会は、封建社会における地主と農夫に代わって、企業家と従業員を中心に営まれる市場経済の社会で、自由で平等な自立した個人によつて構成され、各人が自己の利益を追い求めることが可能である。そして、その利己心の発揮が社会を発展させる原動力だと見た。個人が利己心を発揮できない社会主義社会は、旧ソ連や北朝鮮のように発展できないことは明確である。

また、競争的で自由な市場では、各人が自己の境遇を改善しようとする努力が「神の見えざる手」に導かれて、社会全体の厚生を増大させようと考えた。利己心の利潤追求が社会全体の厚生を増大させることを認めたのである。

例えば、自分だけパンを高く売ってもうけようとしても、市場メカニズムが働けば高いパンは売れないから、その店は淘汰されることになる。村社会では、そのような人は、村八分になってしまう。しかし、誰よりも早く起きて美味しいパンを安く作って売ればその店は繁盛する。それは社会貢献である。利益を求めようとすれば、社会に貢献しなければならない。

しかし、市場は単なる交換システムであり、財とサービスの供給者と需要者の取引が価格によつて調整される場であり、そこからは愛や倫理・道徳は生まれない。市場における財と貨幣を媒介とする売り手と買い手という人と人との間接的な関係は、市場を取り巻く家族、地域社会、国家、民族などの共同体における伝統的で地域性を有する人と人との直接的な結びつきによつて支えられ、そこから生まれる倫理・道徳によつて規定されている。

何が正しいかと言う価値観や倫理・道徳は、ボールディングも言うように、愛のシステム、統合システムである家族や地域社会、国家などの共同体からしか生まれてこない。アダム・スミスは、キリスト教と英国の伝統文化に基づいて、個人を単位とする個人主義を理論の基礎にしているが、その個人は、さまざまなコミュニティに包み込まれ、伝統的文化や宗教倫理規範に従って行動するものと考えられていた。

スミスの挙げた次のような事例がある。家の前に行き倒れの人があった。普通であれば、介抱して家に入れてあげるだろう。もしそのような行為をしなかった場合に、その人は村人から「なんてひどいやつだ。」と指弾されて、村に住めなくなるかもしれない。しかし、丁寧に介抱してあげたら「彼は紳士だ」と評価されて、その村での生活がしやすくなる。

自分の利益のために人を押しのけたり、人に害を与えるなど人に恨まれる方法でやった場合には、後で周囲の人からしっぺ返しを受けるわけだが、その前に自分自身の中のもう一人の自分が「そんなことをして利益を求めたら、周囲から排除されても仕方がないぞ」という声を聞く。これは内なる神、内なるもう一人の自分という存在がいて、その声と一

致するのだ。

スミスが強調しているのは、共同体の「人の目」と「神の見えざる手」「内なる神・良心・理性」である。ボールディングは、それを「統合システム・integration system」と呼んだ。それは「愛のシステム」を意味している。アダム・スミスの同感愛は愛のシステムの普遍的表現である。市場は単なる「交換システム」なので、全体が統合システムによつて愛で包み込まれていないと凶暴なものになりかねない。

誰もが認めるいけないことは「法」となり、その分野は国家権力が強制力によつて裁く。アダム・スミスは「夜警国家論」を説き、国家は国防・司法・警察だけを担当しそれ以外は、民間に任せよと主張した。「強制システム」としての法は必要ではあるが限界がある。それが極端に現れると共産主義社会のような密告社会、監視社会になってしまう。法における「幅」の部分、個々人の良心の問題でもあるので、宗教や道徳、文化などによつて補っていく必要がある。

それらが期待できなくなつていくところに現代社会の問題がある。福祉社会は、この統合システムが機能しなければ成立しない。その核心には、愛・同感・sympathyがあるべきだとアダム・スミスは述べた。「同感」とは、人の悲しみを自らの悲しみにし、人の喜びを自らの喜びとする人間の感性であり、また神が人類に与えたものである。それがあからこそ、市場経済になつても人間らしい生き方が可能なのだ。

神から与えられた人間の本性として「同感」は、誰にでも内在しているが、その同感の作用には程度の差、強弱の差がある。見ず知らずの人に対しては同感が働きにくい、そのような薄い関係の人に対して犠牲を払ってまで行動を起こすのは、同感が利己心と一致する場合であると、スミスは考えた。つまり、そこで人を助けてあげなければ、それが自分にとって不利益になるという一種の損得勘定である。

利己心の発揮と道徳的な感情に伴う行動とは、離反せず調和している。利己心の発揮が、社会全体の厚生・幸福の増加に繋がる。それを発揮させない阻害要因が中世社会であつた。みんなが自分の境遇を改善しようと努力しないので、社会全体も個人も発展しない。それは現代史における共産主義社会も同様であつた。

現代の社会においては都市化により共同体的要素が壊れてしまったために、人の目が作用しない、顔見知りの社会でもない、同感の作用しにくい社会となつている。また、人と人とのつながりも切れ、それらを強制する力も働きにくい。

ボールディングは、アダム・スミスの思想には、そのような限界があるので、「人間の責任」としてそのようなことを行うことを説いた。若者もいずれは老人になるので、自分が年老いたときに今度は若者に助けて欲しいと思うだろうから、そう考えて老人のためにすることは、単なる自己犠牲ではなく、自分の為でもあると考えた。これをアダム・スミス流に解釈すれば、「利己心の発揮」と見ることができる。それ故、利己心と人の為の奉仕は、そして人間の責任として同感を発揮して奉仕することは、現代社会においても本質的に矛盾しない。

例えば、医療保険制度とは自分が病気になつた時に困らないように掛けるものだが、幸

いにも今元気であれば医療保険を使わずに済む。不幸にも病気になった人のために保険を掛けたことになるわけだが、それは単に自己犠牲として奉仕しているのではなく、自分も将来いつかは病気にならないとは限らないから自分のためでもある。

さらに、アダム・スミスは人間は、常に誰かの助けを求めないと生きていけない存在であり、子供の時代には育ててくれる家族を必要とし、大人になつても一人で全てのことをすることができないために、分業が発生する。分業が拡大すると、社会がより豊かになるが、市場の拡大が分業を発展させ経済を成長させる。北朝鮮のような閉鎖社会では発展は望めない。人は他の人が喜んでもらえるように生産したり、サービスを提供して、対価を得る。そうした分業の展開によつて社会の発展がなされてきた。そこでスミスは保護貿易に変えて自由貿易を主張していた。現代のグローバリゼーションも大きな市場が得られる点は評価できる。

中国の古典『論語』にも、「利は義の和なり」とあり、私はこの意味を「利益は善き行いの合計に等しくなる」と理解している。「義」とは、社会全体の為に活動することであるが、そうした行動の和によつて、「利」がもたらされる。それは自ずから得られるものであつて、利を追求して義が得られるわけではない。市場を取り巻く共同体の利益を増す善き行いをしたことの合計として、個人や企業に利益が「おのずと」もたらされるのだ。

このような儒教思想が日本を代表する思想家や経営者である石田梅岩、二宮尊徳、渋沢栄一などによつても考えられ、実践されてきた。

現代の市民社会のあり方を考える場合に、スミスが考えていた共同体的な市民社会を基礎において考えるべきだろう。もちろん、共同体的市民社会といつても、共産主義社会のように決して個人を圧殺したり埋没させたりするものではない。東洋の儒教思想においても、まずは自分が立派になることで家庭が治まり、その上に社会、国も良くなると考えたように、その基礎は個人にある。それゆえ、指導者のみならず、国民個々人も立派に生きるようにならなければ、善き社会にはならない。

共同体的要素が失われつつある現在、それをもう一度取り戻すことが必要であり、宗教団体が信者という「くくり」によつて連帯意識を形成させることもその一つであり、そのなかでしっかりした倫理観を教育して行く。企業でも共同体的要素があることで社員の意識が高まる。そうした部分を忘れて、合理性・効率性だけを追求することは弊害が大きい。

共同体の一番基本単位が家庭であるので、家庭がしっかりしてこそ地域や国家もしっかりすることができる。アダム・スミスは同感に関連して、人は親から愛された経験を元に人を愛することができる、逆に愛を感じたことがない人は人を愛することができないから、愛や同感を学ぶのは家庭であり、家庭は最も大切な共同体である旨のことを述べている。従つて、家庭と共同体的要素を再生することによつて、真に自由で活力のある社会を生み出すことができるのである。

ご静聴ありがとうございます。